



Title	《所有》とは, 本来いかなるものであったか?
Author(s)	唐渡, 興宣
Citation	北海道大學 經濟學研究, 30(4), 167-193
Issue Date	1981-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31527
Type	departmental bulletin paper
File Information	30(4)_P167-193.pdf



《所有》とは、本来いかなるものであったか？

唐 渡 興 宣

序 説

《所有》とは何か？これが問われている事柄である。我々の眼前にある《所有》とは私的所有に他ならない。我々の知っている所有とは、私的所有として出来あがった姿態においてのみ現われている。この出来あがった私的所有の根拠を反省 Reflexion してみることこそがここでの課題である。

私はかつて、別の著書で述べておいたが、私的所有とは、「商品生産¹⁾における一般的・社会的生産関係」(Das Kapital. MEW. Dietz Verlag. Erster Band. S, 93, 訳『資本論』(長谷部文雄訳, 青木書店) 第I部182ページ), 以下 D. K. I, S. 93, 訳『資』, 182ページ, と略記する) のもとで生成したものである。それは商品の生産という特有な歴史的・社会的形態規定性を受けた生産のもとで発生したものである。ところで、「商品生産における一般的・社会的生産関係」はそれ自体としては存在しえず、それは交換関係としてのみ現われた。すなわち、「商品生産における一般的・社会的関係」とは、商品生産者達の労働における社会的諸関係に他ならぬものであるが、それらは商品と商品との交換関係という物象的諸関係のうちに消失するものであった。労働という人々の活動は商品という物象・結果のうちに消失し、その消失したところで生成する人々の意志を第一原因として発生したのが私的所有であった。したがって、私的所有とは、物象的関係に隠蔽された労働における人々の諸関係に根拠があることがわかる。

今や、交換関係、または貨幣関係という物象的諸関係の固い殻をはぎとらなければならない。そうすれば、労働し、作働し、活動する人々がいるではないか。商品と商品との物象的諸関係とは、商品生産社会における社会的総

労働に対する私的労働の社会的関連に他ならないがゆえに、物象的諸関係のヴェールをはぎとるならば、そこでの労働は私的労働としての性格もはぎとられることになる。何らの歴史的形態を受けとらない労働が現われてくる。そこにあるのは、どの規定された社会形態からも独立な労働過程であり、かかる人々の活動、いつの世にも見られるエネルギー的な人々の営みにおいて、《所有》が措定されているのである。

何故ならば、商品が労働をその過程に置き忘れてきたと同じように、私的所有も《所有》をそこに置き忘れてきているのである。それがゆえに労働過程という活動的過程に本来の《所有》が存在するのである。したがって、《所有一般》を明らかにするということは、労働過程の何であるかを明らかにすることに他ならない。

1) 拙著『資本の力と国家の理論』（青木書店、1980年、1貨幣の力）、を参照のこと。

以下、『資本の力』と略記する。

《追加》

所有一般を明らかにするということは、生産一般、又は労働過程そのものを明らかにすることに他ならない。だが、生産一般とは一つの抽象に他ならない。生産は一定の歴史的な形態規定性を受けとってのみ現実的な生産（＝生産様式）となる。とはいえ、生産をどの規定された社会形態からも独立に考察することは可能であり、そこにおいて我々は生産の一般的本性を把握しうる。それと同じように所有も一定の規定された社会的形態から独立に考察することができ、そのことによって所有の一般的本性を把握することができる。ところで、生産一般を考察する場合には、次の如き、方法的自覚が必要である。

「生産一般は一つの抽象であるが、しかしそれは、共通なものを現実に着きださせ、固定させ、したがって我々に反復をまねがれさせるかぎりでは、道理のある抽象である。……生産一般に妥当する規定が分離されなければならないのは、まさに主体である人間と客体である自然とはどこまでも同じだということからすでに生じる統一のために、本質的な差別を忘れてはならないためである」(Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie Dietz Verlag; Berlin, S. 7, 訳『経済学批判要綱』, 大月書店, 7ページ, 以下, Gr. S. 7, 訳7ページ, と略記する)

とはいえ、生産一般から、あるいは労働から資本に直接移行しえないのであり、所有一般から直接に資本主義的私的所有に移行しえないのである。

ここで、『資本論』の体系構成のもつ意味がわかる。「商品」から『資本論』が始まる

のは「商品」が「資本」の産物であり、その結果から考察するという追思考 Nachdenken を行っているからである。この商品、貨幣から資本への移行において「貨幣の資本への転化」の論理がある。この「転化」論の一環として「労働過程」論が説かれているのである。このことを所有論の体系構成という側面から見ると、私的所有から資本主義的私的所有への転化を導くには、《所有一般》をその「転化」の契機としなければならないことがわかる。

私的所有を「労働過程」の考察によってその根拠を反省し、その上で、私的所有という形態を受けた《所有》が資本主義的私的所有として明らかにされるのであるが、今や資本主義的私的所有は活動として、「賃労働と資本の対立」、資本主義的生産過程として明らかにされることがわかる。

ところで、私的所有と資本主義的私的所有とは何であるかは、本稿の対象外であり、それはあらためて別稿において体系的に発表する予定であるが、さしあたっては、拙著『資本の力』Ⅰ、Ⅱを参照されたい。

(1) 労働と所有との本源的同一性

労働過程とは活動的な過程であり、それは活動、労働において把握されるべきである。労働とは何か？

「労働はさしあたり、人間と自然との間の一過程、すなわちそれにおいて人間が人間の自然との質料変換を彼自身の行為によって媒介し・規制し・統制する一過程である。人間は自然質料そのものに一の自然力 Naturmacht として対応する。彼は自然質料を彼自身の生活のために使用されうる形態で取得する aneignen ために、彼の身体に属する自然力 Natur Kräfte たる腕や脚や頭や手を運動させる。彼はこの運動により彼の外部の自然に働きかけてこれを変化させることにより、同時に彼自身の自然を変化させる。彼は、彼自身の自然のうちに眠っている諸力能 Potenz を発達させ、その諸力 Kräfte の働きを彼自身の統制のもとにおくのである unterwirft das Spiel ihrer Kräfte seiner eignen Böttmäßigkeit (傍点筆者)」(D. K. I, S.192, 訳 329-330 ページ)

労働は「さしあたり zunächst」は人間と自然との一過程である。ここでさしあたっての労働の何であるかが規定される。すなわち、直接的な、さしあたっての、あるいは、人々にまずもって直接的に認識される労働とは、人間と自然との一過程という形態を受けとる。そこにおいて人間は自然質料そ

のものに一つの自然力 *Naturmacht* として対応する。人間はさしあたり、自然に対して自然力 *Naturmacht* として対応するのであるが、この力は人々に対立する形態にあり、それがゆえに、それは *Macht* という力であった。その自然力 *Naturmacht* が労働を媒介にして生産的、創造的な自然力 *Naturkraft* に転化する。すなわち、彼は自然質料を彼自身の生活のために使用されうる形態で取得する〔わがものとする *aneignen*〕ために彼の身体に属する自然力 *Naturkräfte* たる腕や脚や頭や手を運動させる。彼は、この運動により彼の外部の自然に働きかけてこれを変化させる。

したがって、《所有》とは、人間自身の自然のうちに眠っている諸力能 *Potenz* を発展させ、その諸力 *Kräfte* の働きを彼自身の統制のもとにおくことである、とさしあたり理解することができる。人間自身の諸力、自然力とは、何よりも労働力 *Arbeitskraft* に他ならない。したがって、所有とは、人間が彼自身の労働力の働きを彼自身の統制のもとにおくことである。

これこそ労働の内容に他ならない。労働の内容とは、労働力を発展させ、新たな能力を獲得し、質的に発展した労働力を創造することに他ならない。その形態は、質料的富を取得する活動である。すなわち、質料的富の取得という活動を通じて、労働力の発展という内容が実現されるのである。質料的富を形成する活動とは、労働力の発展という労働の内容を実現するために必然的に従わなければならない形式であり、他のあり方では実現しえない労働の形式（規範）である。

マルクスは自然力としての人間自然を極めて注意深く使いわけている点に着目する必要がある。すなわち、人間の身体に属する自然力は即自的には人々に対立する *Naturmacht* としての自然力である。それが労働を媒介として変化せしめられ、彼の統制のもとに置かれるものとなるや、それは *Naturkraft* としての自然力となる。*Macht* としての力は人々に対立した、疎遠な力であるが、*Kraft* としての力は生産的で創造的な力である。一般に人間に内属する自然力のみならず、外的自然における自然力であれ、それらは即自的には人々に対立し、疎遠な力 *Macht* として存在している。それが労働に

よって濾過されるや、そしてそれらの諸力が人々の統制に服し、生産的なものとして利用されるかぎりでは、それらは生産的で創造的な力 Kraft となる（この点については、拙著『資本の力』、序章、を参照されたい）。

直接に提供されるがままの自然は人間の対象ではない。そこでの人間と自然との対立は労働を通じてのみその対立は止揚される。その対立したあり方はたえざる人間と自然との相互作用における人間の主体的活動、媒介的活動によって止揚されていくのであって、そこにおいて自然の力 Macht は人々に領有〔わがものとする獲得〕される力 Kraft に普通に転成していくものである。自然と人間の一過程において、この対立しあう両項は主体としての人間によって始めて総括され、人間へと導く媒介活動によってその対立したあり方は止揚され、より高次のポテンツにおいて人間の力が現われる。それが労働力に他ならない。

労働は自然質料を人間の生活のために使用されうる形態で取得する〔わがものとする aneignen〕ためになされる。その意味で、労働は取得、獲得であり、自然の人間化である。だが、こうした獲得を通じて獲得されるのが、労働力に他ならない。労働は自然質料の形態を変化させる形態変化労働である。この直接的成果が質料的富、第二の自然である。労働はかかる質料的富のうちに消失するが、生産的で創造的な力、労働力がより高いポテンツにおいて、主体として創造されている。

《所有》とは、何よりも生産的で創造的な力である労働力を獲得する〔わがものとする aneignen〕活動に他ならない。かかる獲得、取得が現実実現されうるのは、労働過程に他ならず、労働力が力 Kraft としてその生産的、創造的なあり方を示すのは現実に発現される場合のみである。発現しない労働力は可能的にのみ労働力なのであって、それは労働力であることをやめる。労働力の発現は労働そのものであり、したがって《所有》は労働においてのみ確証される活動的なあり方なのである。それは労働過程という過程的存在として規定されたあり方をしているものなのである。所有が過程的存在であるということは、それは何よりも労働的存在であるということを意味

する。

(2) 意識的活動としての所有

自然力 *Naturmacht* としての力が労働力として獲得され、それを統制するためには、意識的、自覚的にその諸力の働きを制御しなければならない。労働は合目的な活動、創造であり、目的を実現するためには、人々は自己の意志をその目的に従属させなければならない。この目的に規定され、それに従属した意志が、労働過程全般を統制しなければならない。

質料的富、労働生産物の獲得という労働の形式は直接にその労働のあり方、何をいかにしてつくるか、という労働の規定された形式、を規定する。かかる規定された労働の形式は労働様式をなす。すなわち、目的意志に導びかれて展開する労働は具体的有用労働であり、労働は労働様式によって具体的に規定されたあり方を示す。その具体的有用労働は何よりも有用的成果、使用対象を形成すべく指揮されなければならない。

労働過程とは、その全過程が意志によって主導され、領導される過程であり、意識的な活動に他ならない。

したがって《所有》とは、労働力をわがものとする事 *Aneignung* であるが、その労働力の発現の意識的、計画的、自覚的な統制、支配に他ならない。生産力とは、生産過程で作用する生産的な力 *Produktivkraft* であり、それは生産過程以外の場面では可能的な力でしかない。したがって、《所有》とは、労働力を生産的な力として領有することに他ならない。

領有とは、単なる意志支配というのではなく、意志に従属した労働力の働きを制御するのであるから、現実的な活動なのである。人間は意識する主体としてではなく、何よりも実践の主体として《所有》者となる。

《所有》における意志とは、労働そのものの本性から生ずるのであり、それゆえ労働は意志を固有なものとした合目的活動なのである。したがって、《所有》における意志は活動に固有であり、労働から独立して生起する観念的なものではない。それゆえ、私的所有における物象との観念的交渉、意

志とは本質的に異なるものである。

(3) 《所有》の一般的規定

労働力は発現してこそ現実的な労働力となる。しかし、労働はそれの対象、手段を欠いたままでは現実的な労働になりえない。労働力が現実的な労働力となりうるには、その対象、手段と結合しなければならない。

「労働過程の簡単な諸契機は、合目的な活動または労働そのもの、その対象、およびその手段である」(D. K. I, S. 193 訳, 331 ページ)。

労働の対象とは、まずは土地(水も含まれる)そのものであり、それは労働の一般の対象である。それに対して、土地から切り離され、人間の手をつけ加えられ、労働によって媒介された労働対象は原料という規定を受けとる。

労働手段とは、「労働者が自分と労働対象との間に差し入れてこの対象に対する彼の活動の伝導体として彼のために役立つ」物に他ならない。「労働者が直接的に占有する *bemächtigen* 対象は、……労働対象ではなく労働手段である」。労働手段は労働者に直接的に占有され、それは何よりも「能力手段」であり、「彼の自然の姿を延長する一器官」である。労働者が直接的に占有し、支配するのが労働手段であるのは、それが労働者の能力を対象化した能力手段であり、「彼の自然の姿を延長した一器官」であるからであり、それは人間の非有機的身体として結合する点にあるからである。(Ibid., S. 196, 訳, 332 ページ)。

労働手段は労働という活動と直接的に結合されており、それがゆえに直接的な占有の対象なのである。占有という意志支配も決して労働手段との観念的交渉としてではなく、労働の本性から生ずるところの、労働に固有な合目的性という活動と結合した意志支配に他ならない。

労働が対象化されたならば、過程は消失し、労働生産物が現われてくる。この生産物の立場から考察するならば、労働手段と対象は共に生産手段として現象し、労働は生産的労働として現われる。

労働生産物という結果から考察する思考形態は追思考 *Nachdenken* とい

う高次の思考形態である。生産手段とは、追思考という学問的思考の本質をなす思考形態から規定された労働の手段と対象である。生産的労働も労働そのものとは区別された高次の概念である。労働生産物という結果から考察してのみ、労働手段、対象が合理的に利用されたかどうか、労働が生産物に合目的に結実したかどうか判断しうるのである。生産物が有形的形態にあるかどうかは、結果のうらに消失する労働過程に原因があるのであり、結果が目的として表象された前提 *Voraussetzen* に一致したものとして措置 *Setzen* されたかどうかは生産物の立場からのみ反省しうることであるからである。²⁾

かくして、今や《所有》は労働力と生産手段との結合した一過程として把握される。今や生産手段は労働の対象的諸条件から、労働の肉体として同化され、肉化されている。生産手段をその肉体とした物質的過程としての労働過程は、生産手段をわがものとした労働主体の活動に他ならない。³⁾

労働過程は結果から見れば、生産過程として現われ、労働は生産となる。労働力は生産手段を自己の力の発現の契機として肉化し、それに支援されており、それは労働の生産力として現われる。労働力は生産手段をその力の発現としての労働の肉体として同化することにより、労働力は労働の生産力となる。

したがって、《所有》とは労働主体が労働の生産力を統制し、意識的にそれに主体として振るまうことに他ならない。そのことによって労働過程が現実的な生産過程として確証されるのである。

「人間は、その生産においては、自然そのものと同じように振舞いうるのみ、すなわち諸質料の形態を変化させうるのみである。それどころか、この形態変化労働そのものにおいて、人間はたえず諸自然力 *Naturkräfte* によって支持されるのである。だから労働は、それによって生産される諸使用価値・質料的富の唯一の源泉ではない。ウィリアム・ペティがいうように、労働は質料的富の父であって、土地はその母である」(D. K. I, s. 57—68, 訳, 126 ページ)。

生産過程を労働主体としての労働者の立場から見るならば、労働力を含めた諸自然力を操ることによって質料的富を生産することに他ならない。したがって、外的自然における自然の諸力をわがものとした労働力は労働の生産力として現われたのであり、それは労働主体の「理性の狡智」の発揮に他ならなかった。

労働者は労働手段を自己の能力を対象化した能力手段として用い、対象に働きかけ、それらの物の力学的、物理学的、化学的な諸属性を利用する。これらの諸属性こそ諸自然力として映じるものであり、それらは生産物の立場から見るならば、生産物形成に不可欠の諸力として役立ったのであり、生産諸力としての規定を受ける。これらの生産諸力とは労働力に外的に対立する自然の諸力である。両者の対立は生産過程において統一せしめられている。これらの諸力を統一させ、総括する主体は、自然の諸力に対立している一方の極であるところの労働力であり、かかる労働力によって総括された生産諸力が労働の生産力として現われるのである。それらは生産過程において一つの力として結集されており、それらを構成する諸力よりも高いポテンツにおいて現象する。すなわち、労働の生産力は労働力と自然の諸力の媒介的主体として、両極の対立を止揚したものとして、今やいづれの契機よりも高次の力能、ポテンツとして現われてくる。それは媒介的主体としては最も包括的な姿で表現されているのである。

労働は今や生産手段と結合し、何をいかにして、何によって質料的富をつくるのか、という労働の形式は具体的な労働様式として現われる⁴⁾。この規定された労働様式のもとで、その内容としての労働の生産力が展開し、《所有》が実現する。

- 1) 「人間の労働能力の発達がとくに労働手段あるいは生産用具の発達に示されるのは、自明なことであり、事態の本性から当然出てくることである。つまりそれは、次のことを示すのである。すなわち、人間が、彼のもろもろの労働目的に合わせてすでに整えられ、規制され、かつ伝導体として彼の意志のもとに置かれている自然を、あいだに割り込ませることによって、彼の直接的労働の自然的なものに及ぼす作用をどの程度にまで高めたか、ということである」 (Zur kritik der politisch

en. Ökonomie ((Manuskript 1861-1863)) Bd 3. Teil. I, S. 50, 訳『資本論草稿集』1-4, 大月書店, 86 ページ, 以下, MEGA, S. 50, 訳 86 ページと略記する)

- 2) この点で, 「生産物の立場」ということが十分に理解されなければならない。宮沢賢治氏は労働過程と生産過程との区別を次のように示す。

「われわれは, 彼(マルクスのこと——筆者)が, 労働・労働手段・労働対象を生産過程の三契機として把握していたこと, そして, 現象的には生産過程として現われる過程をその主体的契機において内実的に把握して, それを労働過程として認識しようとする傾向にあったことを知ることができる」『唯物史観と労働運動』(ミネルヴァ書房, 1974 年 55 ページ)。

「このことを(上記のこと——筆者)十分考慮するならば, 労働過程を生産物の立場から見たのが生産過程であると解釈するだけでは, 生産過程と労働過程との関連をけっして十分にとらえたことにはならない」(同上, 55 ページ)

富沢氏は以上の如く, 生産過程を主体的契機である労働の面からとらえた場合に, それが労働過程であるという側面を強調されることによって「生産物の立場」という視点を事実上放棄されている。そうして, 労働が生産手段と結合すればそれは生産過程となるというように理解されている。この労働における主体と客体との関連を認識することは重要であるが, しかし, それによって「生産物の立場」という視点を欠落させたままでは, 労働の対象手段が生産手段として, 労働が生産的労働として, より高次の力能, ポテンツにおいて総括される事情が説明しきれないのである。たとえば, 労働の対象と手段も共に生産の客体的契機であるから, 労働に対して一括されて生産手段という規定を受けるという説明にしかないのである。そこでの区別は生産の諸要因が客体的か主体的かの区別を持っているだけである。富沢氏は以下の表記においてそのことを図式化される(同上, 50 ページ)。

生 産 $\left\{ \begin{array}{l} \text{主体的契機} \\ \text{客体的契機} = \text{生産手段} \end{array} \right. \left\{ \begin{array}{l} \text{労働手段} \\ \text{労働対象} \end{array} \right.$

この図式化はそれ自体としては正しいが, しかし, これによって労働の生産力が生産の推進的自立の主体としてより高次のポテンツにおいて現われるということは表現されえないのである。

- 3) 「規定的労働が用具を取得する aneignen [わがものとする] のは自らの活動の材料としてであり, 材料を取得するのは自らの活動の材料としてである。現実的労働は, これらの対象を, 生気を与えられた肉体として, 労働そのものの諸器官として取得する過程である。ここでは材料は, 労働の非有機的な自然として, 労働手段は取得する活動そのものの器官として現われる」(MEGA, S. 51, 訳 90 ページ)。
- 4) ついでながら述べて置くならば, 筆者は, かかる具体的に規定されている労働の形式を労働様式と規定したのであるが, それはまた《技術》として規定することができる。周知の如く, 今日, 技術とは, 労働手段体系であるとする「労働手段体系

説」のあることはよく知られている。かかる技術を労働手段として見る見解はブルジョア社会においてのみ妥当する見解である。ブルジョア社会にあっては、労働様式は何よりも資本によって規定され、労働者にとっては彼の労働は労働手段によって規定されるものとなる。そこでは、労働手段は労働に奉仕する手段ではなく、労働者をして生産に駆り立てる手段である。それがゆえに、資本のもとでの労働様式は労働手段が規定的なものとして現われてくる。労働が労働手段によって規定されると見ることは、どの規定された社会からも独立な労働ではなく、それはブルジョア的労働観なのである。

我々はブルジョア社会にのみ固有な技術の規定＝労働手段体系に対して、労働様式を対置する。この労働様式を技術として規定することによって、技術が包括的に規定され、労働手段は能力手段として登場しており、技術に対して人間が自立的主体として登場していることが理解されるであろう。

(4) 生産的個人の創造としての所有

生産は同時に再生産であり、この再生産において生産物は労働が対象化された結果としてではなく、それは新たな過程を開始する条件として現われてくる。それが生産手段として利用されるならば、労働の生産力を高める手段として現われる。生産手段は生産的に消費され、それは生きた労働の条件となる。それが消費手段として生産されるならば、それは生きた個人の生活手段として現われ、労働者、したがって労働力を再生産する。それは生産において獲得された新たな力能を再び発揮させる条件となる。労働力はより発展しており、この発展した労働力はその能力手段としての生産手段に反映され、その高められた力能を発揮する生産手段は労働力の発展を媒介する。労働生産物はそれが生産手段としてあるか消費手段としてあるかを問わず、それらは過去における人々の能力が対象化されており、人々はこれを継承して人々の能力を高める条件とする。労働生産物が今や人々の能力を発展せしめる生産諸力として現われる。

「だから、現存する生産物が労働過程の成果であるばかりでなくその実存条件でもあるとすれば、他方では、その生産物を労働過程に投入れること、つまりそれを生きた労働と接触させることは、過去の労働のこの生産物使用価値として維持し実現させるための唯一の手段である」(D. K. I, S.198 訳 338 ページ)

労働において生産物が消費（否定）されるが、それは同時にこの生産物が使用価値として維持（保存）され、実現される過程でもある。かくして労働こそは肯定的止揚（高められる）としての運動なのであり、それは労働主体がより高次の労働の生産力を発展させていくエネルギーな過程であり、その都度、それは労働の前提、条件、制約、限界を乗り越えていくものであるということがわかる。

かかる再生産過程の主体は生きた生産的個人である。過程を主導するのはいつでも労働主体であり、人間自身である。人間は何よりも生産的個人としてあるかぎり、その能力を発展させ、その能力を発展せしめる条件を肉化していくのである。かくして、再生産を通じた労働の生産力の発展は所有の発展に一致するのである。

《追加》I.

《自己自身を再生産する個人としての自己に復帰する活動》としての《所有》

マルクスは『経済学批判要綱』(Grundrisse der Kritik der Politischen ÖKonomie)における『序説』において「生産一般」について考察し、生産的個人の創造の視点を提出する。すなわち、生産一般の考察を生産、消費、分配、交換（流通）において考察し、生産物の生産という形式を通じた生産的個人の創造という生産の内容を展開する。

① 〔消費と生産〕

マルクスはまず、消費と生産の一般的関係について考察する。

生産は直接に消費である。第一に、生産において個人はその能力を消費し、第二に生産手段を消費する消費に一致する。この生産は生産的消費であり、本来の消費は人間の身体を生産する。この消費は第一の生産物の破壊から生じる第二の生産である。第一の生産では生産物が物となり、第二の生産では、生産者によってつくられたものが人間となる (Gr. S. 12, 訳 12-13 ページ)。

生産と消費は直接に同一物でありながら、同時に反対物であり、両者は相互に媒介運動を行う。生産は消費のための材料を生産し、消費は生産物に対して始めて主体を創造する。汽車の走らない、消費されない鉄道はただ可能的に鉄道であって現実的な鉄道でないように、生産物は消費によって最後の仕上げを受ける (ibid, S. 12, 訳 13 ページ)。

消費がなければ生産もなく、消費は生産を二重に生産する。第一に、消費によって生産物は現実的な生産物となり、生産物に仕上げの一はけを加える。第二に、消費は新しい生産の欲望、生産の衝動を創造する。消費が生産の対象を、内的対象として、欲望として、衝動として、目的として、観念的に指定する (Gr. s. 12, 訳 13 ページ)。

他方、生産は消費に対して、第一に、その対象を生産する。第二に、生産は消費に規

定、性格、その仕上げを与える。すなわち、一定の仕方の消費を指定する。「料理された肉をフォークやナイフで食べて満たされる飢餓は、手や爪や牙の助けをかりて生肉をむさぼり食う飢餓とは、別の飢餓である」(Gr. s. 14, 訳 13 ページ)。生産は消費の様式と消費者を生産する。第三に、消費を欲望、衝動として生産する。芸術の対象が審美能力ある公衆を創造するのと同じである。生産は消費の対象、様式、衝動を生産する。それと同様に、消費は目的を規定する欲望としては生産者に訴えることによって、生産者の Anlage (構想、素質) を生産する。

生産は消費の対象を創り出し、消費は生産のための目的としての欲望をつくり出す。最初の生産行為で展開された Anlage (構想、素質) を反復によって完成にまで高め、生産物を生産物として完成させる。生産者は生産者となる。生産は消費の様式を創造し、消費能力そのものを欲望として創造する。人々は生産において、自己の能力を展開し、消費能力、欲望を創造し、人々の Anlage を創出し、能力を発展させていく。かくして、生産的個人が創造される。

個人は一つの対象を生産し、それを消費することによってふたたび自己に復帰するが、しかしそれは、生産的個人としての、自己自身を再生産する個人としての自己に復帰するのである。このようにして消費は生産の契機として現われる (Gr. S. 15, 訳 16 ページ)。

かくして消費は生産に対立するものであるが、生産によって媒介され、総括される。かかる消費を自己の契機とした生産はその繰り返しの中に、人々の素質、構想、能力、欲求を発展させ、生産的個人を創造していく。生産的個人の創造とは、何よりも人々の諸能力を発展させていくことであり、それは諸能力をわがものとする獲得＝所有にはかならないことがわかる。それは自己自身を再生産する個人としての自己に復帰する活動としての所有なのであり、生産的個人の所有＝《個人的所有》なのである。

② 「生産と分配」

生産と消費は直接に同一性にありながら、同時に対立物である。この生産と消費の媒介的運動において人々の諸要求、諸能力、素質が形成され、生産的個人の創造的力 Kraft が形成され、獲得される。ところで、社会では、生産者の生産物に対する関係は、生産物が完成したとたんに外的なものとなるのであって、生産物の主体への復帰は、この主体の他の個人に対する関係に依存している。主体は生産物を直接にわがものとするのではない。また、彼が社会で生産する場合、生産物の直接的領有が目的ではない。生産物と生産物との間には分配が介入する。それは社会的に生産物の生産者間の分け前を規定する。生産と消費の間には分配が介在している (Gr. S. 16, 訳 16 ページ)。

生産物の主体への復帰は生産者相互の関係に媒介される。分配は「その対象を社会的法則に従って分配する」(Gr. S. 16, 訳 16)。これは「生産のしくみ」によって規定される。

「分配は、それ自体が生産の産物である。それは、ただ対象の点からみて、生産の結

果だけが分配されるということばかりでなく、また形態の点からみて、生産への参与の一定の仕方が分配の特殊な形態を、分配に参与するその形態を規定するということである (Gr. S. 16, 訳 16 ページ)。

生産物の分配の前に「生産用具の分配」と「社会成員の分配」があり、これが「生産の仕組み」を規定しており、その結果として生産物の分配がある。したがって、生産諸要因の分配は歴史的な前提 *Voraussetzen* として生産に規定的に作用していくが、かかる本源的とみえる分配も生産が措定 *Setzen* したものとなり、生産の繰り返し、再生産のうちに、歴史的成果に転化する。かくして、分配は生産の包摂的契機となる。生産は自己の前提、条件を自ら生産することによって、それを自己の活動の諸条件＝生産の諸条件とする。それがゆえに、分配は生産の包摂的契機となるのである。

③ 【生産と交換】

最後に、生産と消費は交換によって媒介される。交換はすでに分配されたものを個々人の欲望に従って分配するのであり、分配が社会から出発する契機であるならば、交換は個人から出発する契機として規定される。

だが、これは表面的な規定であって、内実にあっては、第一に、生産自体の中でおこなわれる諸活動と諸能力との交換が、直接に生産に属し、生産の包摂的契機をなす。第二に、交換は生産物の生産の手段をなし、第三に、いわゆる商人と商人との間の交換は直接に生産によって規定されている。交換は生産と独立に存在するように見えても、生産によって規定されている。

以上において、生産、分配、交換、消費は「一個の総体の肢節を、一つの統一の内部での区別」をなし、生産は「生産の対立的規定のうちに、自己を包摂するとともに他の諸契機をも包摂している」ことがわかる。生産はつねに過程の出発点にあり、分配、交換、消費、に過程的に媒介される。生産は自己に対立する諸契機を自己自身の活動の契機として措定しつつ、総体的運動としての生産、分配、交換、消費の推進的基軸をなす。過程は生産に始まり、生産に復帰する。

以上の総体的運動は生産的個人を再生産する個人としての自己に復帰する活動であり、生産的個人の創造が過程の内容をなすということが今や明確になる。人間が何よりも生産的個人であるかぎり、自己を発展させ、創造していくことができる。

かくして、生産と所有とは同一なのであって、それは自己自身を再生産する個人としての自己獲得する活動なのであり、この活動主体としての個人において所有は《個人的所有》として現われる。

《個人的所有》とは、生産的個人としての個人が生産的で創造的な力 *Kraft* を創造しようとする絶対的な運動であり、それは絶えず自己の限界を乗り越えていくエネルギー的な活動なのである。したがって、それは単に物を持つこと *Haben* ということの中に安住していることでもなければ、それは何か実現されるべき理想、理念でもない。

《個人的所有》とは何よりも自己を変革し、絶対的な創造のうちにある生としての運動である。かかるエネルギーな原理の貫徹こそが《個人的所有》の実現である。それは、自己にとっての諸制限、諸制約、諸前提、諸条件を克服し、その力 Kraft の実現のための対象の諸条件を変革し、それらをわがものとして自己自身を発展させようとする絶対的創造、運動である。

《追加》Ⅱ. 個人的所有と共産主義

ここに我々は共産主義の最も根源的な科学的根拠を見出すことができる。《個人的所有》が人間と自然との一過程において、絶えざる否定の否定＝肯定的止揚としての絶対的な創造を貫徹していくものであるとすれば、運動としての共産主義こそ、人間と自然との媒介的統一をはかるその最も自覚的表明であるばかりか、共産主義はこのエネルギーな原理を基礎に据えることによって、科学的に基礎づけられるものとなる。共産主義とは私的所有の肯定的止揚（＝否定の否定）である。共産主義とは何か成就されるべき、理念でもなければ理想でもない。今、現にある既存の社会的諸関係を変革しようとするエネルギーな運動である。それは何よりも私的所有を成立せしめている既存の社会的諸関係を克服する運動である。かかる人と人との関係は人と自然との関係によって制約されている。それがゆえに人間と自然との媒介的統一をはかる運動が共産主義の基礎となるのである。

(5) 社会的所有と個人的所有

《個人的所有》とは、生産一般という一つの抽象において獲得されたカテゴリーである。そこにおいて人間は個人として、他の個人からは独立に考案された。だが、人間は共同的存在であり、人々は結合し、協働において社会を形成している。社会とは、実体的に見るならば、それは人々の結合において形成されており、活動性という側面から見ると、それは人々の協働において形成されている。協働とは人々の結合を基礎にした協働的生産に他ならない。《所有》は、いまやかかる協働として実現されるものとなる。

労働力は他の人々との協働のなかでのみ現実的な力となるのであって、孤立して存在する労働力は抽象的な労働力に他ならない。社会から孤立して存在している人間が存在しないように、労働力も他の人々との何らかの社会的関係のもとにおかれた労働力であり、社会的関係から孤立して存在する労働力は存在しない。したがって、労働力とは、人々との協働において獲得さ

れ、また発現する社会的力 *gesellschaftliche Kraft* である。それは人々が相互に計画的に協力し、その力を自乗化し、倍加した力として発揮する社会的力のことである。たとえ人々はその力を自分一人で獲得したかに見えようとも、人々は他の人々との一定の社会的関係の中でその力を獲得しているのである。労働力とは何よりも人々との結合において発揮され、協働において現実的となる社会的力なのである。

《所有》とは、何よりも社会的所有である。《社会的所有》とは、さしあたり、一定の社会的関係にもとづいて結合した人々が協働で社会的力をわがものとするに他ならない。かかる社会的労働の産物は社会的生産物に他ならない。したがって、《社会的所有》とは、社会的生産物を社会（＝結合した人々）が獲得するという形式を通じて、社会、すなわち結合した人々が協働で発揮する力、社会的力をわがものとするに他ならない。

人々の協働しあう一過程は社会的労働の過程である。したがって、《社会的所有》とは社会的労働に一致する。社会的労働が今や社会と自然を媒介する主体として登場している。社会に対立する自然を社会へと領導する媒介、総括において今や社会が主体となっている。今や、人々の一全体が主体として協働的に発揮する結合の力はより高いポテンツにおいて実現される。かかる協働的に発揮される社会的力を社会が統制し、意識的に支配することが《社会的所有》に他ならない。

社会的労働は生産手段と結合しており、社会的労働は共同的に利用される社会的生産手段としての生産手段によって現実的となる。社会的労働は生産手段に支援されて社会的な生産となる。かかる社会的生産において発揮される生産力は社会的労働の生産力、または労働の社会的生産力に他ならない。

生産手段は今や社会的労働に不可避的契機としての自然力であり、それは主体としての結合労働力によって動員される自然力である。人々の結合において形成されている社会の存立の客体的条件、物質的基体としての土地は社会によって動員される自然力を内蔵しており、それは社会的労働の肉体として合体せしめられる自然力の宝庫をなす。人々の協働によって形成され人々

の社会的力の対象化された能力手段としての労働手段が社会的労働手段として利用される。かくして、龐大な自然の諸力が社会的労働の肉体として同化され、労働の社会的生産力が現われる。

社会的所有とは、社会的生産であり、社会的に結合した労働体がこの過程において作用する主体的・客体的な生産諸力を労働の社会的生産力、または社会的労働の生産力として総括し、わがものとするに他ならない。

生産はいつでも社会的な生産である。それは同時に社会的再生産である。それは主体としての社会に絶えず復帰する社会的な活動であり、社会は自然を変革するとともに自己自身を変革する。社会は自己自身を創造する絶対的な創造において主体となる。社会が自己自身を変革するとは、その結合のあり方、協働のあり方を変革することに他ならない。この変化した社会は自然を我がものとする媒介的活動＝社会的生産のあり方を変化させ、それは社会のあり方を変革する。人々の結合の様式を規定する諸関係は生産関係に還元される。社会的生産のあり方は生産様式をなす。生産様式はいつでも、それがたとえいかなる形態規定性にあろうとも、社会的生産様式である。この社会的生産様式とは、人々の協働によって、何を、いかにして、何によって、生産するかを規定された一定の生産であり、それは協働の産物としての生産物によって規定されるものである。このことは例えば、独立自営の小商品生産においても妥当する。すなわち、そこでの労働は社会的分業の一環としての私的労働であるが、社会的分業の肢節として協働に参加しているのである。私的所有はその意味において《社会的所有》に、実は特有な仕方に参加しているのである。したがって、人々はいかなる社会形態にあろうと、何らかの形式で協働しているのである。その協働は社会の成員を再生産するための質料的富を生産している。いかなる生産も社会的生産物の生産という形式をとっており、かかる生産の形式としての生産様式のもとで、その内容としての社会的労働の生産力が展開し、それが社会によって獲得される。

《所有》とはいっても本来的なあり方は社会的所有であり、所有の主体はいつでも社会である。個人的所有とは、個人がかかる社会の成員をなすかぎ

りで個人的所有としてあるのである。個人は何らかの仕方では社会形成としての結合と協働に参加しており、したがって個人的所有は同時に社会的所有を実現しているのである。社会的所有と個人的所有とは同一なのであり、個人的所有は社会的所有を実現すべく、それに参加する個人に着目した社会的所有である。個人的所有は同時に社会的所有である。個人的所有を協働で実現しているならば、それは社会的所有であり、両者は同一態の表現である。

以上のことは、個人としての個人は一つの抽象であり、個人は他の個人との協働のさなかでのみ現実的個人として現実性を獲得するがゆえに、所有の主体は社会であるということに帰結することを意味する。すなわち、協働としての活動的社会のさなかでのみ個人的所有が実現され、人々は個性的なあり方で個人的所有を貫徹するのである。

《追加》Ⅰ. 共産主義と社会的所有

ここで我々は共産主義のより進んだ科学的基礎づけを得ることができる。すでに述べた如く、人間と自然との一過程において労働力が媒介の主体としてより高次の労働の生産力を創造した。それが人間と自然との一過程を媒介する自立的主体として労働過程の推進力として現われた。かかる労働の生産力の発展を意識的、主体的に領導するエネルギー原理こそ共産主義の根底的な原理であった。

今や、共産主義は個人が推進力ではなく、社会が推進力をなしているということが提出されていることがわかる。自然と社会との一過程において、社会はその媒介の主体としてより高次のポテンツをもった社会的労働の生産力を創造する。そこにおいて、社会はより高次のポテンツを持った社会として自己を変革する。社会は自然との媒介過程によって媒介されて自己を変革する。

社会が自己を変革するとは、人々が結合し、協働しているそのあり方、そこでの人と人との関係を労働の生産力の発展にしたがつくりかえることに他ならない。それを実現するのは諸個人に他ならないが、当の諸個人は当の社会的諸関係に規定され、条件づけられて存在している。したがって、彼等を規定づけている諸関係をつくりかえるとは、自己自身を変革することに他ならない。諸個人はそれをこの協働する諸個人とともに実現するのである。

かかる社会そのものの諸個人の協働による変革は新たな自然の諸力を動員しより高次の社会的労働の生産力を動員することを可能にする。共産主義とは、自然と社会との媒介的過程をたえず変革せんとするものである。そこにおいて諸個人は自然（人間的・自然的

と外的自然)の制約性を克服し、それを社会へと導びく社会のあり方を変革し、社会の諸個人に対する制約性、限界性を克服するものである。かかる諸個人にとって前提・条件・制約をなす自然と社会をたえず個人が他の個人と協働で自覚的に変革していくことが共産主義としての エネルギッシュな原理である。したがって、共産主義とは、自然と社会との媒介的統一としての社会的労働の生産力の自然発生的発展を今までの人類史として総括し、社会的労働の生産力を意識的、自覚的に人々の協働によって推進していくことに他ならない。そのための諸制約、諸限界をたえずエネルギッシュに変革していくことに他ならない。そこにおいて、自然と社会に対して規定されず、逆に主体的に振るまいする個人を創造することが共産主義としての運動であり、そこにおいて諸個人は《自由な個性》を獲得することができる。いままでの人類の歴史は、社会的労働の生産力の自然発生的な発展であり、その歴史的展開において個人的所有を抽象的にかつ自然発生的に措定してきたのである。したがって、共産主義とは、抽象的かつ自然発生的に措定されてきた《個人的所有》を人々の協働で意識的、主体的に、その現実性において《再建》することである。

マルクスにあっては、《個人》とは、一定の社会的形態から独立に規定された人間であった。個人が現実の社会のなかで考察される時には、個人は社会的関係に規定され、その被造物として登場し、個人としてではなく諸関係の人格的担い手としてでてくる。

従来、所有論が問題とされるときに、個人的所有と私的所有とが区別されないで語られてきたが、これは厳密に区別されるべきである。ブルジョア社会にあっては個人は何よりも私人、私的人格として現われてくるのである。私人とは、何よりも近代ブルジョア社会に規定され、媒介された個人なのであって、それは結合し、協働する個人の疎外態に他ならない。

ブルジョア社会にあって人々が私人、私的人格として現われてくるということは、物象的諸関係に媒介されている。そこに人々は「物的依存に基づく人格の独立」として現われ、人々は社会の中で、自他を区別し、社会の中で自己を個別化しうる能力を内的力として獲得する。それは「自己意識」をもつ人間であるが、かかる自己は私的所有において現実性を得る。「我所有す、ゆえに我あり」が土台となって「我意識す」という私人が登場したのである。かかる所有の自覚において独立の個人が現われた。それは更に、自然法、および古典派経済学において、我労働す、ゆえに我ありと反省された。彼等の表象における労働がいかにブルジョアの労働であろうとも、個人の独立は労働の自覚において措定されている。これこそ自然発生的な共産主義の出発点であった。それは粗野な共産主義の出発点であった。その意味で私的所有は共産主義をその対極において必然的に生み出さねばならなかった。

とはいえ、個人を個人として抽象することは、何よりも私人という形式であれ、人格の独立の時代を迎えたブルジョア社会においてのみ可能だったのである。独立した人格

が登場してくるということは、偉大な歴史の進歩であった。かかる自己意識ある個人、自己を他者に対して主体化する独立の人格の登場は自覚的な人々の結合と協働の前提であって、それは物象的連関の力に従属した社会を否定し、人々の自覚的な協働として形成される社会を担っていく個人を可能性において創出しているのである。ここに私的所有の肯定的止揚としての共産主義の意義が明確になってくる。

《追加》Ⅱ. 所有と生産との同一性

所有と生産とは同一であるということに異をとえられるのが大野節夫氏である。氏は「所有を法律的表现にすぎないもの」と規定することには勿論反対されている。所有の法律的表现は私的所有において完成し、それは活動として把握されず、何よりも意志を第一原因として生成した。法的表現としての所有とは法律という意志の対象化において規定された所有であり、それはイデオロギーの力 Macht によって規定されたものである。それは《所有そのもの》と区別されるべきである。それでは、所有とは大野氏によっていかなるものとして把握されているであろうか？

「所有諸関係は、まず、生産の二要因、労働力と生産手段とにたいする人々の主体的関係をあらわしている。かかる所有関係は、一定の生産様式を規定するものであり、その生産様式の基礎となる」(『生産様式と所有の理論』青木書店 1971 年, 117 ページ)

大野氏は「所有が労働、生産以前に存在し、それを規定するものである」ことを主張される。そこでの所有とは、生産の二要因に対する人々の「主体的関係」であるとされる。この「主体的関係」において何が表現されているであろうか。この場合の「主体」とは認識の主体か、実践の主体か？大野氏は「主体的関係」という表現によって、理解をきわめて困難とされている。大野氏は所有を労働、生産として把握しないのであるから、所有をその生産の諸要因に対する振るまいという活動としては理解していないことになる。生産の諸要因に対して活動主体として振るまうということは生産そのものであり、生産において人は実践の主体となる。そこに「主体的関係」が現われる。生産以前における「主体的関係」は何を意味するであろうか。そこにおける主体とは、ただ意識をもち、認識の主体としての人間だということにならないであろうか。これこそ、所有ではなく、私的所有を語っていることにならないだろうか。意志を第一原因として生成する私的所有を所有一般として語っていることにならないだろうか。

私は、大野氏とは別の意味で生産に対して所有が概念的に先行することを認める。すなわち、生産において、労働力とこれに対立する自然の諸力を労働の生産力として総括し、その働きを統制することなしに、質料的富を形成しえないという意味においてである。この意味において人は労働者である前に所有者でなければならないが、これは所有と労働とは同一であるということを語っていることに他ならない。

ところで、大野氏は生産の前に所有関係があることをもって、所有が生産の前にあることと解してもいるようである(同上, 118 ページ)。生産の前に所有関係があるという

ことはその通りであり、それは生産の前に生産関係があることを主張することと同義である。丁度、交換関係があり、それによって交換過程があるのと同じである。この場合の関係は交換という過程の一つの抽象であり、交換の何であるかが明らかにされて始めて、そこでの関係も何であるかが理解される。これと同じであって、所有の前に所有関係があるからといって、所有が生産の前にあるということにはならないのである。大野氏は所有と所有関係とを混同しているようである。所有関係は所有したがって、生産によって始めて実現されるものなのである。所有関係に規定された人々の活動が所有として実現する。

大野氏は自説の論拠にマルクスの一文を引用して論証にかえておられる。

「およそ人間は（孤立してであれ社会的にであれ）つねに、労働者としてあらわれる前に、所有者として現われる」(Theorien über den Mehrwert, Marx-Engels Werke, Band 26 III, S. 370, 訳『マルクス・エンゲルス全集』26 III, 491 ページ, 以下, Mw, S. 370, 訳, 491 ページと略記)。

これはマルクスがシエルブリエを批判して語ったもので、これはシエルブリエが労働にもとづく所有が資本のもとで転変するという主張に対して批判するものであった。シエルブリエ等にあっては、労働にもとづいて所有がなしうと解し、それゆえに労働者であるがゆえに所有者であると主張する。マルクスはこれを何よりも商品流通のもとで生成する仮構であると主張する。すなわち、人々は何よりも労働者である前に所有者(私的所有者)であることを主張する。

このことは、何よりも私有財産が登場していらい、人々は労働者である前に所有者であり、人々が歴史を持ってからは、所有が種々の歴史的形態規定を受けたとはいえ、かかるものとして登場してきた。人々が動物状態から脱した段階で、自然発生的であれ、社会を形成し、その社会の中で自然発生的に分業を形成し、その分業に人々が服属するようになり、はじめて私有財産が生まれるのであり、人々は所有者として登場する。このことは先に大野氏が引用している一文の次にあるマルクスを更に読んでいけば明白である。

「たとえその所有が単に、彼が自然にたいする所有として自分自身に付与するもの(または彼が家族や種族や共同体としてあるいは自然にたいする所有として、あるいはすでに生産されたものである共同の生産手段に対する所有として、取得するもの)にすぎないにしても、そうである。そして、最初の動物的な状態が終わる時には、自然にたいする所有はいつでもすでに共同体や家族や種族などの成員としての彼の定在によって媒介されている。すなわち、自然にたいする彼の関係を制約するところの、他の人間にたいする関係によって、制約されている」(同上, S. 370, 訳, 491 ページ)。

人々は自然との関係において、人々は所有者として、自然に意志を置き入れる主体として登場する。その意志が人々の相互承認でもって、それがいかなるものであれ、媒介される。こうした私的所有の純粹に発展した形態が近代的私的所有である。この歴史の

過程は所有の発展であり、それは私的所有という外皮をまとって、今日の形態にまで純化されたのであり、所有ははじめから私的所有として現われ、それが排他性と社会性を純粹に示すようになったのはやっと今日の近代市民社会においてである。こうした私的所有が問題なのではない。一定の歴史的、社会的形態から独立な所有が問題なのである。現実にはかかる所有一般というのは存在せず、それらは一定の歴史的形態をまとい、私的所有として発生した。

「妻と子供たちがそこで夫の奴隷である家族のうちに、すでにその萌芽、その最初の形態をもっている」(『ドイツ・イデオロギー』広松渉編訳, S. 32-33)

「この最初の財産 Eigentum は、この場面ですでに、財産とは他人の労働力に対する強制指導なりという今日の経済学者たちの定義に全く適っている。ともあれ、分業と私有財産とは同一態の表現なのであって——後者において活動の生産物との関係で言表わされていた当のものが、前者においては活動との関連で言表されている次第なのである」(同上, S. 34-35)

分業が人格の依存関係であれ、物象的關係によって媒介されようと、分業によって人々の歴史が出発し、それは近代ブルジョア社会において開花する。したがって、それは私有財産の歴史といってもよいのである。マルクスが労働者である前に所有者であるというのは以上の意味においてである。我々がなさんとしているのは、労働者であるまゝに所有者として現われてくる種々の歴史的、社会的形態から独立した所有の何であるかである。

(6) 富 と 所 有

ブルジョア社会にあっては、富は商品として現われた。富としての商品は使用価値と交換価値の二要因からなる物象であった。富としての商品は、質料的富としての使用価値、社会的形態の富としての交換価値、の二重物であった。すなわち、ブルジョア社会にあっては富は物象的富として現われた。

ブルジョアの富は使用価値と交換価値との媒介的統一であるが、この媒介はつねに交換価値の側からなされ、この媒介者としての交換価値は使用価値と交換価値という対立しあう両項を総括するものとして、したがって主体として現われた。この主体としての交換価値は貨幣形態において自立化して現われ、貨幣においてブルジョアの富はその最高のポテンツを示すところの自立的主体にまで高められる。かかる貨幣という社会的富の私的所有こそがブルジョア社会の主要関心事となる。それは何よりもブルジョア社会の自立的

主体であり、富として最高のポテンツにあり、それがゆえに人々はそれを《よいもの》として評価し、《価値》を見い出し、それにつきしたがっていくものである。

だが、《所有》とは、自己自身を再生産する個人としての自己に復帰する活動であった。生産的個人の能力を発展させ、その能力の発現の諸条件、諸制約、諸限界を乗り越えようとするエネルギーギッシュな活動であった。したがって、これこそ真の《富》＝《価値》に他ならない。それは何よりも労働の生産力を発展させることに他ならない。労働の生産力とは、すでに述べたように、労働力と自然の諸力との媒介的統一に他ならなかった。この媒介はつねに労働力の側からなされること、またこの媒介者としての労働力は労働力と自然の諸力、Macht として対立しあう力の両項を生産的で創造的な力 Kraft として総括するものであり、それは労働の生産力として現われ、それは両項よりもつねに高いポテンツとして、主体として現われる。かかる労働の生産力の発展、創造というエネルギーギッシュな活動こそ富に他ならない。かかるたえざる生成、創造のうちにある活動こそが《価値》＝《富》、絶対的な価値なのである。

ブルジョア社会にあっては富は商品の交換価値＝価値において包括的な姿態をもって現われた。その質料的要素としての富は労働を父とし、土地を母とするものとして、ウィリアム・ペティによって述べられた。これは富についてのブルジョア経済学が到達しえた最高の認識であり、それがゆえに彼等によっては乗り越えることのできなかった所産のものである。

我々は質料的富としてではなく、普遍的な富としての労働の生産力の発展、創造に《価値》を与える。労働生産物という結果のうちに消失するエネルギーギッシュな活動に普遍的価値を与える。ブルジョア社会にあってはそれを価値の増大とは見ないで、価値の低下として見るのである。だが、今までの歴史とは、何よりもかかる普遍的価値の創造、普遍的富の増大の歴史だったのである。

かかる富、価値の創造、その増大という運動は共産主義という人々の運

動によって始めて現実性を与えられて登場してきた。すなわち、かかる富・価値の創造は何よりも人々の協働によって形成されてきた。それは何よりも社会的労働の生産力、または労働の社会的生産力の創造として営まれてきた。それは《自然の人間化、人間の自然化》である。人間と自然との関係は、人と人との社会的関係を規定し、人々の社会的関係は人と自然との関係を規定する。この二重の関係において歴史は形成されてきた。その二重の関係を媒介する推進の主体こそ社会的労働の生産力であった。すなわち、社会と自然のこの対立を媒介し、統一せしめる主体はいつでも社会であり、その媒介的統一としては社会的労働の生産力がより高次のポテンツにおいて現われ、そこにおいて自然の人間化と人間の自然化がより高次の次元で実現されていくのである。かかる社会的労働の生産力を創造しようとして協働する人々のエネルギーな活動が社会的富であり、人々はいかかる協働に《社会的価値》を見い出すのである。

かくして、我々はマルクスとともに次の言葉を共有できる地平に立つことができる。

「偏狭なブルジョアの形態を一皮むけば、富とは、普遍的な交換によって作りだされる個人の欲望、能力、享受、生産力等の普遍性でなくてなんだろうか？ 自然諸力——いわゆる自然の諸力でもあり、人間固有の本性 *Natur* の諸力でもある——に対する人間の支配の完全な発展ではないのか？ 先行する歴史的発展は、発展のこの総体性、言いかえると既成の尺度ではまったく測れないような、あらゆる人間の諸力そのものの発展を自己目的とするが、《富》とはこの先行する歴史的発展以外のどんな前提ももたない、人間の創造的素質の絶対的創出ではないのか？ そこでは彼は、ある規定性のうちに再生産されるのではなくて、彼の総体性を生産するのではないのか？ 何か既成のものにとどまろうとするのではなく、むしろ生成の絶対的運動のうちにあるのではないか？ ブルジョア経済——そしてそれに対応する生産の時代——においては、人間内奥のこの完全な創出は、それを完全に空にすることとして現われ、そしていっさいの定められた一面的な目的廃棄は、自

己目的をまったく外部的な目的のために犠牲にすることとして現われる」(Gr. S. 387, 訳, 421 頁)。

かくして、かかる活動として《富》が措定されることによって、《富》と所有とが一致するものとなる。《富》とは、「人間の創造的素質の絶対的創出」、その「生成の絶対的運動」なのである。人間の内奥の創出というエネルギーギッシュな活動を《富》として人々が認識するならば、この《富》としての活動に価値が付与される。共産主義とは何よりもかかる価値の創造運動なのである。

ブルジョア社会にあっては、価値は交換価値、または貨幣として現われ、人々のはかかる価値に従いがい、この価値増殖を目的とするものとなる。ブルジョア社会にあっては、人々は富の創出において「総体的疎外」として抑圧される。したがって、ブルジョア社会において、富が商品として現われるということを経験するということは、ブルジョア社会に対する痛烈な批判であるということを経験する人々は知っていなければならない。私的所有の肯定的止揚としての共産主義とは、何よりも物象的富をエネルギーギッシュな活動としての《富》に転化させることに他ならない。

《追加》Ⅰ. 貧困と富

以上から《富》の言葉の真の意味が理解できるであろう。同時に、それに対極にある《貧困》の何であるかも理解できるであろう。《富》が人間の総体的発展の創出、人間の創造的素質の創出、であるとしたならば、それに対立する《貧困》とは、何よりもそうした《富》としての活動から疎外されることに他ならない。ブルジョア社会にあっては、貧困とは、物象的形態の富の私的所有から排除されることとして現われるが、それは何よりも《富》としての活動から疎外されることに他ならない。それは労働力の発展から疎外されること、「人間内奥のこの完全な創出」が「完全に空にされる」ことを意味する。それは何よりも労働力(人間の総体性)の破壊として現われる。更に、普遍的に述べるならば、それは何よりも社会的労働の生産力の破壊として現われる。したがって、それは協働する人々の諸能力が破壊されることだけを意味しない。それによって媒介され、社会へと導びかれる自然の諸力の破壊をも意味する。したがって、総体としての自然の諸力の破壊こそが貧困である。

《追加》Ⅱ. 質料的富と所有

個人的所有とは、生産的個人が労働の生産力を獲得し、発展させることに他ならな

った。それは生産物の取得という形式を通じて実現される労働の内容であった。したがって、所有とはなによりも労働（＝生産）に一致したのである。この労働主体としての労働者と労働生産物との関係は労働者と労働との関係によって規定される。労働者が労働の生産力の領有者であるかぎり、彼は労働の統制者であり、労働過程は彼に属する一過程である。その結果として、労働生産物は彼によって獲得される。

ところで、労働（＝生産）は社会的労働（＝社会的生産）として営まれる。社会的所有とは、人々の協働の内容としての社会的労働の生産力を協働的に獲得することであった。個人的所有が実現されるのは、個人が協働の成員をなすかぎりにおいてであった。したがって社会的労働の過程が社会に属する一過程であるかぎり、労働生産物は社会によって獲得され、労働生産物は社会的に分配される。

「社会では、生産者の生産物に対する関係は、生産物が完成したとたんに外的なものとなるのであって、生産物の主体への復帰は、この主体の他の個人に対する関係に依存している。主体は生産物を直接にわがものとするのではない。また、彼が社会で生産する場合、生産物と生産物との間には分配が介入する。それは社会的に生産物の生産者間の分け前を規定する」(Gr, S. 16, 訳, 16 ページ)

生産物の主体への復帰は生産者相互の関係によって規定され、それは社会的に決定される。そこでの分配は生産への参与の仕方、によって規定される。すなわち、直接的生産者が、労働の生産力に対していかなる関係をもっているかによって規定される。それは、労働力と生産手段とに対していかなる仕方に関係しているかによって規定づけられる。したがって、この社会的な分配を規定づけるものは、生産そのものの形態、その性格にある。

社会的に決定された分配は更に交換によって媒介され、この交換によって生産物が各個に第二次的に分配されていく。この交換という個々人に生産物が帰属していくその形態は、交換の内実としての生産自体の中で行われる諸活動と諸力能の交換の一定の形式、したがって、協働様式によって規定される。

以上から、所有とは何よりも生産において第一義的に把握されるべきであり、その結果として生産物の取得が規定されるのである。かかる生産物の取得としての所有は、本来の所有の帰結であり、それによって規定される第二義的なものであることがわかる。このことは私的所有のもとではどのように現われるであろうか。

私的所有一般とは、資本主義的私的所有という特殊的性格を捨象した私的所有に他ならない。この私的所有のもとでは、労働、又は生産という活動は物象の社会的関係のうちに消失し、後には何らの根拠も残さないものとなっていた。労働、または生産が現われるのは資本主義的私的所有においてである。資本のもとでの生産についてはここでくわしく述べるわけにはいかないが、ひとまず、労働と生産物とがいかなるものとなるかについて、簡単に述べて、資本主義的私的所有と《所有》とを対比しておこう。

労働過程は資本家のもとでは、それは資本家の統制のもとに服するものとなる。労働

者は今や資本家の統制のもとで労働する。労働過程を合目的に導く意志は資本家の意志であり、労働者はこの意志に従属している。更に、生産手段は資本家の購買した私的所有物である。したがって、生産手段と結合した労働が展開する労働の生産力は資本の生産力となり、労働過程そのものが資本家のものとなっている。

「労働過程は、資本家が購買した諸物の間の、彼に属する諸物の間の一過程である」(D. K. I, S. 200, 訳, 341 ページ)。

かくして、労働生産物は労働過程そのものが、したがって労働の生産力が資本家に属することによって、労働生産物が資本家の所有物となる。労働主体としての労働者と生産物との関係は労働がいかなる性格のものであるかによって規定されるのである。すなわち、労働過程で発揮する諸力が誰によって領有されているかによって、生産物が誰に帰属するかが根拠づけられる。資本主義的私的所有も、労働の生産力がどのように領有されているかによって始めて解明される。

したがって、いわゆる「否定の否定」によって再建される「個人的所有」が、消費手段は個人的に獲得されるが、生産手段は社会的所有である、等々として議論されることがいかに的是なすれものであるかが理解されよう。この点については別稿において述べる予定である。